

Working Paper Series (J)

No.37

中年未婚者の社会的孤立の実態とその特徴
The Reality of Social Isolation of Middle-aged Unmarried People
and its Characteristics

藤森克彦（日本福祉大学福祉経営学部）・杉山京（日本福祉大学福祉経営学部）

Katsuhiko FUJIMORI and Kei SUGIYAMA

2021年01月

http://www.ipss.go.jp/publication/j/WP/IPSS_WPJ37.pdf



〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 6階

<http://www.ipss.go.jp>

本ワーキング・ペーパーの内容は全て執筆者の個人的見解であり、国立社会保障・人口問題研究所の見解を示すものではありません。

中年未婚者の社会的孤立の実態とその特徴

藤森克彦（日本福祉大学福祉経営学部） 杉山京（日本福祉大学福祉経営学部）

1. 問題意識および研究目的

中年未婚者が増加している。生涯未婚率¹は、男女ともに1985年まで5%以下で推移したが、1990年以降急激に上昇し、2015年の生涯未婚率は、男性23.4%、女性14.1%となった。そして国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によれば、2040年の生涯未婚率は、男性29.5%、女性18.7%になると推計されている²。日本は、80年代までの「皆婚社会」から大きく変わってきた。

ところで、一般に未婚者は、配偶者だけでなく、子どももいないことが考えられる。このため、未婚者は既婚者と比べて、他者とのつながりが乏しく、社会的孤立に陥るリスクが高いことが推察される。また、先行研究をみると、社会的に孤立する人は、孤立していない人に比べて、抑うつ傾向、経済的困窮、不健康に陥りやすいことなどが指摘されている³。

一方、これまでの社会的孤立に関する研究は、高齢者を調査対象にしたものが多く、中年未婚者を対象にした研究は乏しい。そこで本稿では、中年未婚者の社会的孤立の実態と、社会的孤立に陥りがちな中年未婚者の属性や課題を考察する。

研究目的としては、①中年未婚者において、社会的孤立に陥る人はどの程度いて、どのような実態にあるのか、②社会的孤立に陥る中年未婚者はどのような属性か、③社会的孤立に陥る中年未婚者は抑うつ傾向、経済的困窮、主観的健康状況の悪化といった課題を抱えているか、といった点を明らかにする。

2. 先行研究の検討

「社会的孤立」について一律な定義があるわけではないが、英国の社会学者ピーター・タウンゼントは「家族や地域とほとんど接触がないという客観的状态」と定義している。この定義は、「社会的孤立 (social isolation)」を他者との関係性が乏しいという客観的状态と捉えており、「孤独(loneliness)」といった主観面と区別をしている。先行研究では、この定義に基づく研究が多い。本稿でも、「社会的孤立」について、家族や友人、近隣の人々など他者との関係性が乏しいことと定義する。

その上で、先行研究では、社会的孤立をどのように測定するのかという点について、様々な操作的定義が用いられてきた。例えば、阿部(2014b)は、「社会的孤立」について、①社会的参加(組織・活動への参加の欠如)、②社会的交流(会話の頻度、家族・親族・友人等との接触の欠如)、③社会的サポート(道具的サポートや情緒的サポートの欠如)、に分類している⁴。

内閣府(2014)では、20～59歳の1万人を対象として、孤立者の概数推計や社会的孤立の状況

¹ 「生涯未婚率」は、50歳時点の未婚者の割合を示す。

² 総務省統計局『国勢調査報告(各年版)』、国立社会保障・人口問題研究所(2018)『日本の世帯数の将来推計(全国推計)』(2018年推計)による。

³ 例えば、齋藤(2018)は、高齢者の社会的孤立を中心に、その課題を指摘している。

⁴ 阿部彩(2014b)「包摂社会の中の社会的孤立—他県からの移住者に注目して—」(『社会科学研究』第65巻第1号, 2014年5月)。

などを考察している⁵。同調査の「孤立者」の定義は、(1)「コミュニケーションの希薄」に関して、①全会話が少くない人、②私的会話が少くない人、(2)「社会的サポートの受領」に関して、③心理的サポートについて「頼れる人」がいない人、④道具的サポートについて「頼れる人」がいない人、(3)「社会的サポートの提供」に関して、⑤心理的サポートを「提供する相手」がいない、⑥道具的サポートを「提供する相手」がいない、といった3分野の6つの定義から構成されている。コミュニケーションの度合いや社会的サポートの受領のみならず、社会的サポートの提供を孤立概念に含んでいることがひとつの特徴と考えられる。

その他の調査をみると、社会的孤立について、1つの孤立類型について考察した研究もあげられる。例えば、情緒的サポートを取り上げた調査⁶や高齢者の社会的交流を取り上げた調査⁷などがある。

先行研究から「社会的孤立」の操作的定義を整理すると、①社会的交流の欠如（会話頻度などが少ない）、②受領的サポートの欠如（「頼れる人」がいない）、③提供的サポートの欠如（「手助けをする相手」がいない）、④社会参加の欠如（社会活動に参加しない）、に大別される。

次に、中年未婚者と社会的孤立の関係性についての先行研究をみると、高齢者の社会的孤立の先行研究に比べて乏しい。藤森(2016b)は、40代と50代の未婚者について、単身世帯と二人以上世帯に分けて分析をしている。そして、受領的サポートについて、現時点では、親などと同居する二人以上世帯に属する中年未婚者は、単身世帯の中年未婚者よりも、「頼れる人がいる」と回答する人の比率が高い。一方、高齢期について尋ねると、二人以上世帯の中年未婚者では親が先に死亡することが考えられるので「高齢期に頼れる人がいない」と回答する人の比率が高まり、単身世帯との差が小さくなることを指摘している。

3. 調査方法

(1) 使用するデータ

使用する統計としては、国立社会保障・人口問題研究所『生活と支え合い調査』(2017年7月実施)を用いる。これは、厚生労働省が実施する「平成29(2017)年国民生活基礎調査」で全国を対象に設定された調査地区(1,106地区)内から無作為に選ばれた調査地区(300地区)内に居住する世帯主および18歳以上の個人を対象として2017年7月1日現在の世帯の状況(世帯票)および個人の状況(個人票)について調べたものである。調査方法は配票自計、密封回収方式による。

その結果、世帯票の配布数(世帯票の調査対象数)16,341票に対して、回収票数は10,959票、有効票数は10,369票であった(回収率67.1%、有効回収率63.5%)。また、対象世帯の18歳以上の個人に配布した個人票の配布数(個人票の調査対象数)26,383票に対して、回収票数は22,800票であった(回収率86.4%)。ただし、回収票のうち重要な情報が抜けている3,000票は無効票として集計対象から除外したため、有効票数は19,800票、有効回収率は75.0%となった。

本稿で取り上げるのは「40代と50代の中年未婚者」である。40代と50代の中年未婚者につい

⁵ 内閣府(2014)『「絆」と社会サービスに関する調査—結果の概要』p.5。

⁶ 石田光規(2011)『孤立の社会学』勁草書房

⁷ 齊藤雅茂, 冷水豊, 武居幸子, 山口麻衣(2010)「大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連」『老年社会科学』第31巻第4号, 2010年1月)

て、本調査に用いたすべてに欠損値のない 532 名を分析対象者とした。その性別は、男性 335 名 (63.0%)、女性 197 (37.0%) であり、年齢は 40 代が 346 名 (65.1%)、50 代が 186 名 (35.0%) であった。

(2) 本調査で用いる調査項目

本調査では、個人票のうち「社会的孤立」に関する調査項目として「会話頻度 (問 23)」「受領的サポート (問 28)」「提供的サポート (問 29-8)」「社会参加 (問 25)」を用い、中年未婚者における「属性等」及び「課題状況」として「性別 (問 15 (1))」「年齢 (問 15 (2))」「父母との同居 (問 30 (3))」「現在の介護経験 (問 8 (1))」「現在の就業状況 (問 10)」「主観的健康状態 (問 1)」「現在の暮らし向き (問 20 (1))」「K6 (問 4)」「昨年度の年収 (問 21)」の項目を用いた。

① 「社会的孤立」に関する調査項目

本調査では、中年未婚者における「社会的孤立」の状況について、先行研究の操作的定義を参考に、「会話頻度」「受領的サポート」「提供的サポート」「社会参加」の 4 つの指標から評価することとした。

「会話頻度」については「あなたはふだんの程度、人と会話や世間話をしますか」との質問に対して「毎日」「2～3日に1回」「4～7日(1週間)に1回」「2週間に1回」「1ヶ月に1回」「ほとんど話をしない」の 6 件法で回答を求めた。

「受領的サポート」については、「①子どもの世話や看病」「②(子ども以外の)介護や看病」「③重要な事柄の相談」「④愚痴を聞いてくれること」「⑤喜びや悲しみを分かち合うこと」「⑥いざという時のお金の援助」「⑦日頃のちょっとしたことの手助け」の 7 項目について、頼れる人の有無を尋ねている。回答は、各々「頼れる人がいる」「頼れる人はいない」「そのことで人には頼らない」の 3 件法で求めている。

「提供的サポート」については、受領的サポートと同様に「家族・親族」「友人・知人」「近所の人」「職場の人」の各人が、受領的サポートで設定した 7 つの事柄について助けを必要とするとき、「その事柄をするかどうか」について尋ねている。本稿では、「7 つすべての事柄に関して手助けをしない」を選択するか否かの項目に着目した。

「社会参加」については「自治体や町内会」「ボランティアやNPO」など 7 項目について、「1 年以上前から参加している」「この 1 年以内に新たに参加するようになった」「参加したいができない」「参加する予定はない」を尋ねている。本稿では、「1 年以上前から参加している」あるいは「この 1 年以内に新たに参加するようになった」を「参加している」として、「参加している」「参加したいができない」「参加する予定はない」の 3 つの選択肢に整理して、調査項目とした。

② 「属性等」及び「課題状況」に関する調査項目

中年未婚者における「属性等」の項目のうち「主観的健康状態」は「あなたの現在の健康状態はいかがですか」の教示文に対して、「よい」「まあよい」「ふつう」「あまりよくない」「よくない」の 5 件法で回答を求めている。

「現在の就業状況」は、現在の収入に伴う仕事をしているか否かについて、「仕事をしている」「仕事をしていない」で回答を求めている。

「K6」は、うつ病や不安障害を評価・スクリーニングするための調査項目であり、全6項目で構成されている。回答は「まったくない：0点」「少しだけ：1点」「ときどき：2点」「たいてい：3点」「いつも：4点」の5件法で求められる。また6項目の合計得点が「10点以上」のとき、厚生労働省『国民生活基礎調査』では「うつ・不安障害が疑われる」と判断される。

「現在の暮らし向き」については「大変ゆとりがある」「ややゆとりがある」「普通」「やや苦しい」「やや苦しい」「大変苦しい」の5件法で回答を求めている。

「昨年度の年収」については、税・社会保険料を引いた後の手取りの金額について、実数（万円）で回答を求めた。

（3）分析方法

本研究では第一段階として、中年未婚者における「社会的孤立」の特徴とその状況を明らかにするために、「会話頻度」（1項目）「受領的サポート」（7項目）「提供的サポート」（4項目）「社会参加」（7項目）の4つの指標（計19項目）を用いてクラスター分析（Ward法）を行った。

第二段階として、にクラスター分析により抽出されたクラスター間の特徴を明らかにするため、「社会的孤立」に関する4つ指標ならびに「属性等」や「課題」について、 χ^2 検定と一元配置分散分析を行い、その有意性は5%有意水準とした。

なお以上の解析には、「IBM SPSS 24J for Windows」を用いた。

4. 調査結果

（1）中年未婚者の社会的孤立状況

中年未婚者における社会的孤立の状況を明らかにするため、「会話頻度」「社会参加」などの4指標の調査項目を用いてクラスター分析を実施した結果、出力されたテンドログラムとその解釈可能性から、クラスター1「非孤立群」、クラスター2「孤立予備群」、クラスター3「孤立群」と解釈された3つのクラスターが抽出された（表1）。そして、中年未婚者で、社会的孤立に陥る人の割合は、孤立群の4.5%と考えられる。

（表1）クラスター分析の結果

	クラスター1 (非孤立群)	クラスター2 (孤立予備群)	クラスター3 (孤立群)
度数	384	124	24
相対度数	72.2%	23.3%	4.5%

下記の表2～5は、各クラスターの特徴を確認するため、4つの社会的孤立指標について χ^2 検定を行った結果である。「社会参加」の「ボランティア・NPO」「PTAや保護者会」を除いたすべての社会的孤立指標を構成する調査項目において、統計学的な有意差が確認された。

以下では、社会的孤立4指標のうち統計学的に有意になった項目を参考に各クラスターの特徴を示していく。

A. 「非孤立群」(クラスター1)の特徴

クラスター1は、分析対象者のうち72.2%で構成されており、他のクラスターに比較して、社会的孤立に陥っていないという特徴があり、「非孤立群」と考えられる。

まず「会話頻度」をみると、クラスター1の94.5%が「毎日」会話をしていると回答していた(表2)。

また「受領的サポート」については、全ての項目において「頼れる人がいる」と回答した比率が、他のクラスターに比べて高く(表3)、「頼れる人がいない」「そのことで人に頼らない」と回答した人の比率は低かった。特にクラスター1は「重要な事柄の相談」「愚痴を聞いてくれること」「喜びや悲しみを分かち合うこと」の項目で「頼れる人がいる」と回答した人の比率が他のクラスターよりも高く、9割を超えていた。

次に「提供的サポート」では、「家族・親族」「友人・知人」「近所の人」「職場の人」の各々の人に対して「介護や看病」「重要な事柄の相談」などの「サポートを提供しない」と回答する人の比率が、他のクラスターよりも低い水準であった(表4)。具体的には、「家族・親族」や「友人・知人」に対してサポートを提供しないとした人は1割に満たず、「職場の人」や「近所の人」に対しても、他のクラスターよりも低い水準である。

最後に「社会参加」について、統計学的に有意であることが確認された5項目をみると、クラスター1は、他のクラスターに比べて、社会活動に「参加している」人の比率が高く、「参加する予定はない」の比率が低い傾向がみられる(表5)。

以上のように、クラスター1は、他の2つのクラスターに比べて、①会話頻度が高い人の比率が高いこと、②受領的サポートについて「頼れる人」がいる人の比率が高いこと、③受領的サポートについて、手助けを提供すると回答する人の比率が高いこと、④社会活動に「参加している」人の比率が高いこと、といった特徴があげられる。つまり、クラスター1は、他の2つのクラスターよりも、他者とのつながりをもつ人の比率が高く、「非孤立群」とであると解釈した。

カテゴリー		クラスター1 (n=384)	クラスター2 (n=124)	クラスター3 (n=24)	有意確率
毎日	度数	363	101	0	***
	相対度数	94.5%	81.5%	0.0%	
	調整済み残差	8.1	-2.2	-13.1	
2-3日に1回	度数	18	13	0	
	相対度数	4.7%	10.5%	0.0%	
	調整済み残差	-1.8	2.5	-1.2	
4-7日に1回	度数	3	8	0	
	相対度数	0.8%	6.5%	0.0%	
	調整済み残差	-3.4	3.9	-0.7	
2週間に1回	度数	0	2	0	
	相対度数	0.0%	1.6%	0.0%	
	調整済み残差	-2.3	2.6	-0.3	
1か月に1回	度数	0	0	3	
	相対度数	0.0%	0.0%	12.5%	
	調整済み残差	-2.8	-1.0	8.0	
ほとんど話をしない	度数	0	0	21	
	相対度数	0.0%	0.0%	87.5%	
	調整済み残差	-7.5	-2.6	21.5	

(注) *** ; $p < 0.001$, ** ; $p < 0.01$, * ; $p < 0.05$, n. s. ; not significant

(表3) 受領的サポート						
カテゴリー		クラスター1 (n=384)	クラスター2 (n=124)	クラスター3 (n=24)	有意確率	
子どもの世話や看病	いる	度数	80	1	2	***
		相対度数	20.8%	0.8%	8.3%	
		調整済み残差	5.4	-5.2	-1.0	
	いない	度数	195	64	16	
		相対度数	50.8%	51.6%	66.7%	
		調整済み残差	-0.7	0.0	1.5	
	そのことでは人に頼らない	度数	109	59	6	
		相対度数	28.4%	47.6%	25.0%	
		調整済み残差	-3.4	4.0	-0.8	
(子ども以外の) 介護や看病	いる	度数	218	22	3	***
		相対度数	56.8%	17.7%	12.5%	
		調整済み残差	8.3	-7.1	-3.3	
	いない	度数	135	66	16	
		相対度数	35.2%	53.2%	66.7%	
		調整済み残差	-4.3	3.2	2.6	
	そのことでは人に頼らない	度数	31	36	5	
		相対度数	8.1%	29.0%	20.8%	
		調整済み残差	-5.9	5.8	1.1	
重要な事柄の相談	いる	度数	353	49	8	***
		相対度数	91.9%	39.5%	33.3%	
		調整済み残差	13.1	-11.4	-5.2	
	いない	度数	26	38	12	
		相対度数	6.8%	30.6%	50.0%	
		調整済み残差	-8.0	5.9	5.1	
	そのことでは人に頼らない	度数	5	37	4	
		相対度数	1.3%	29.8%	16.7%	
		調整済み残差	-9.7	9.6	1.4	
愚痴を聞いてくれること	いる	度数	356	31	2	***
		相対度数	92.7%	25.0%	8.3%	
		調整済み残差	16.4	-13.8	-7.3	
	いない	度数	17	42	17	
		相対度数	4.4%	33.9%	70.8%	
		調整済み残差	-10.5	7.1	8.1	
	そのことでは人に頼らない	度数	11	51	5	
		相対度数	2.9%	41.1%	20.8%	
		調整済み残差	-10.9	10.9	1.2	
喜びや悲しみを分かち合うこと	いる	度数	356	31	5	***
		相対度数	92.7%	25.0%	20.8%	
		調整済み残差	16.1	-14.1	-6.0	
	いない	度数	27	46	13	
		相対度数	7.0%	37.1%	54.2%	
		調整済み残差	-9.2	7.2	5.2	
	そのことでは人に頼らない	度数	1	47	6	
		相対度数	0.3%	37.9%	25.0%	
		調整済み残差	-12.2	11.7	2.5	
いざという時のお金の援助	いる	度数	244	26	6	***
		相対度数	63.5%	21.0%	25.0%	
		調整済み残差	8.7	-7.9	-2.7	
	いない	度数	63	45	14	
		相対度数	16.4%	36.3%	58.3%	
		調整済み残差	-5.8	4.0	4.2	
	そのことでは人に頼らない	度数	77	53	4	
		相対度数	20.1%	42.7%	16.7%	
		調整済み残差	-4.4	5.1	-1.0	
日頃のちょっとした手助け	いる	度数	321	36	4	***
		相対度数	83.6%	29.0%	16.7%	
		調整済み残差	12.5	-10.6	-5.5	
	いない	度数	31	44	14	
		相対度数	8.1%	35.5%	58.3%	
		調整済み残差	-8.6	6.4	5.6	
	そのことでは人に頼らない	度数	32	44	6	
		相対度数	8.3%	35.5%	25.0%	
		調整済み残差	-7.3	7.1	1.3	

(注) *** ; $p < 0.001$, ** ; $p < 0.01$, * ; $p < 0.05$, n.s. ; not significant

カテゴリー		クラスター1 (n=384)	クラスター2 (n=124)	クラスター3 (n=24)	有意確率	
家族・親族:1から7 のことはしない	非該当	度数	376	93	15	***
		相対度数	97.9%	75.0%	62.5%	
		調整済み残差	9.0	-7.1	-5.0	
	選択	度数	8	31	9	
		相対度数	2.1%	25.0%	37.5%	
		調整済み残差	-9.0	7.1	5.0	
友人・知人:1から7 のことはしない	非該当	度数	350	79	10	***
		相対度数	91.1%	63.7%	41.7%	
		調整済み残差	8.4	-6.3	-5.4	
	選択	度数	34	45	14	
		相対度数	8.9%	36.3%	58.3%	
		調整済み残差	-8.4	6.3	5.4	
近所の人:1から7 のことはしない	非該当	度数	242	42	8	***
		相対度数	63.0%	33.9%	33.3%	
		調整済み残差	6.1	-5.4	-2.2	
	選択	度数	142	82	16	
		相対度数	37.0%	66.1%	66.7%	
		調整済み残差	-6.1	5.4	2.2	
職場の人:1から7 のことはしない	非該当	度数	295	65	7	***
		相対度数	76.8%	52.4%	29.2%	
		調整済み残差	6.3	-4.6	-4.3	
	選択	度数	89	59	17	
		相対度数	23.2%	47.6%	70.8%	
		調整済み残差	-6.3	4.6	4.3	

(注) *** ; p < 0.001、** ; p < 0.01、* ; p < 0.05、n. s. ; not significant

B. 「孤立予備群」(クラスター2)の特徴

クラスター2は、分析対象者のうち23.3%で構成されており、現時点では社会的孤立に陥っている人の比率は低いものの、今後社会的孤立に陥るリスクが高い「孤立予備群」と考えられる。

まず「会話頻度」をみると、クラスター2では「毎日」会話する人の比率は81.5%であり、クラスター1の94.5%よりも低いものの、8割を超える人が毎日会話をしている(表2)。また、「毎日」会話をしていない人でも「2週間に1回」以上会話をしており、日常的に会話の相手がいるものと考えられる。

次に「受領的支持」をみると、クラスター2では「頼れる人がいない」と回答した人の比率が、全7項目について、クラスター1よりも高く、クラスター3よりも低い中間的な水準に位置付けられる(表3)。また、受領的支持に関するもう一つの特徴としては、全7項目において、「そのことでは人には頼らない」と回答する人の比率が3つのクラスターの中で最も高い点である。例えば、「日頃のちょっとした手助け」について「そのことでは人には頼らない」と回答した人の比率は、クラスター2では35.5%にのぼっていた。

次に「提供的支持」をみると、クラスター2では、「家族・親族」「友人・知人」「職場の人」

のいずれに対しても、「7項目すべてをしない（提供しない）」と回答する人の比率が、クラスター1よりも高く、クラスター3より低い（表4）。両クラスターの中間的な水準である。一方、「近所の人」に対してサポートを提供しないと回答した人の比率が66.1%と高く、クラスター3の66.7%とほぼ同程度であった。

最後に「社会参加」について、統計学的に有意であることが確認された5項目をみると、クラスター2は「自治会や町内会」「宗教団体」で「参加する予定はない」と回答する人の比率が、他のクラスターよりも高く、他の活動についても、約9割前後が「参加する予定はない」と回答していた（表5）。

以上のように、クラスター2の孤立状況は、概ねクラスター1とクラスター3の中間に位置付けられる。一方で、クラスター2の受領的サポートの特徴として、「そのことで人には頼らない」という回答比率が高く、現時点では「人には頼らない」と考えていても、今後人の助けを必要とする時が来るかもしれない。また、提供的サポートにおいて、「近所の人」に対して「7項目すべてをしない（提供しない）」と回答する人が7割弱いる。さらに、約9割の人が社会参加について「参加する予定はない」と回答している。

このように、クラスター2では、現時点では社会的に孤立する人の比率は低いが、高齢期になったときなどに、今後孤立する人の比率が高まる可能性があり、「孤立予備群」と解釈した。

C. 「孤立群」（クラスター3）の特徴

クラスター3は、分析対象者のうち4.5%で構成されており、その4つの指標に対する回答傾向から、既に社会的孤立に陥っている「孤立群」と考えられる。

まず「会話頻度」について、クラスター3では「ほとんど話をしない」の比率が87.5%にのぼっており、会話頻度が極めて乏しい点の特徴である（表2）。

次に「受領的サポート」をみると、クラスター3は、他の2つのクラスターと比較して、「頼れる人がいない」と回答した人の比率が、7項目全てについて最も低かった（表3）。

さらに「提供的サポート」をみると、クラスター3では「家族・親族」「友人・知人」「職場の人」に対して、「7項目すべてをしない（提供しない）」と回答する人の比率が、3つのクラスターの中で最も高い（表4）。具体的には、「家族・親族」に対して37.5%、「友人・知人」に対して58.3%、「近所の人」に対して66.7%、「職場の人」に対して70.8%、となっている。特に「家族・親族」に対しては、4割弱の人がサポートを「提供しない」と答えており、クラスター1の2.1%、クラスター2の25.0%に比べて、高い水準になっている。

最後に、社会参加について、統計学的に有意であることが確認された5項目の中で、クラスター3は、8割以上の人が「参加する予定はない」と回答している（表5）。特に、クラスター3においては他のグループと比較して「職場内の会やグループ」「同じ学校出身者の会やグループ」「趣味の会やスポーツクラブ」に「参加する予定はない」と回答した人が9割以上であったため、そもそも社会参加する意欲の乏しい集団であると推察される。

以上のように、クラスター3は、会話頻度がほとんどない人が9割を占め、受領的サポートにおいて「頼れる人がいない」の比率が高い。受領的サポートにおいて「手助けする人がいない」と回答する比率や、社会活動に参加する意思が乏しい人の比率が他のクラスターに比べて高い。したがって、クラスター3は「孤立群」と考えられる。

(表5) 社会参加						
			クラスター1 (n=384)	クラスター2 (n=124)	クラスター3 (n=24)	有意確率
自治会や町内会	1年以上・以内に参加	度数	101	10	4	***
		相対度数	26.3%	8.1%	16.7%	
		調整済み残差	4.2	-4.2	-0.6	
	参加したいができない	度数	27	2	0	
		相対度数	7.0%	1.6%	0.0%	
		調整済み残差	2.6	-2.1	-1.2	
	参加する予定はない	度数	256	112	20	
		相対度数	66.7%	90.3%	83.3%	
		調整済み残差	-5.2	5.0	1.2	
ボランティア・NPO	1年以上・以内に参加	度数	16	2	0	n.s.
		相対度数	4.2%	1.6%	0.0%	
		調整済み残差	1.6	-1.2	-0.9	
	参加したいができない	度数	34	7	1	
		相対度数	8.9%	5.6%	4.2%	
		調整済み残差	1.3	-1.1	-0.7	
	参加する予定はない	度数	334	115	23	
		相対度数	87.0%	92.7%	95.8%	
		調整済み残差	-2.0	1.6	1.1	
宗教団体	1年以上・以内に参加	度数	43	4	3	*
		相対度数	11.2%	3.2%	12.5%	
		調整済み残差	2.3	-2.7	0.5	
	参加したいができない	度数	6	0	1	
		相対度数	1.6%	0.0%	4.2%	
		調整済み残差	0.8	-1.5	1.3	
	参加する予定はない	度数	335	120	20	
		相対度数	87.2%	96.8%	83.3%	
		調整済み残差	-2.5	3.1	-1.0	
PTAや保護者会	1年以上・以内に参加	度数	5	1	0	n.s.
		相対度数	1.3%	0.8%	0.0%	
		調整済み残差	0.6	-0.4	-0.5	
	参加したいができない	度数	6	0	0	
		相対度数	1.6%	0.0%	0.0%	
		調整済み残差	1.5	-1.4	-0.5	
	参加する予定はない	度数	373	123	24	
		相対度数	97.1%	99.2%	100.0%	
		調整済み残差	-1.5	1.2	0.8	
趣味の会やスポーツクラブ	1年以上・以内に参加	度数	72	13	1	*
		相対度数	18.8%	10.5%	4.2%	
		調整済み残差	2.6	-2.0	-1.6	
	参加したいができない	度数	46	15	1	
		相対度数	12.0%	12.1%	4.2%	
		調整済み残差	0.4	0.2	-1.2	
	参加する予定はない	度数	266	96	22	
		相対度数	69.3%	77.4%	91.7%	
		調整済み残差	-2.4	1.5	2.2	
職場内の会やグループ	1年以上・以内に参加	度数	128	14	1	***
		相対度数	33.3%	11.3%	4.2%	
		調整済み残差	5.4	-4.5	-2.6	
	参加したいができない	度数	13	4	0	
		相対度数	3.4%	3.2%	0.0%	
		調整済み残差	0.4	0.0	-0.9	
	参加する予定はない	度数	243	106	23	
		相対度数	63.3%	85.5%	95.8%	
		調整済み残差	-5.4	4.3	2.8	
同じ学校出身者の会やグループ	1年以上・以内に参加	度数	66	4	1	***
		相対度数	17.2%	3.2%	4.2%	
		調整済み残差	4.2	-3.8	-1.4	
	参加したいができない	度数	31	7	0	
		相対度数	8.1%	5.6%	0.0%	
		調整済み残差	1.3	-0.7	-1.4	
	参加する予定はない	度数	287	113	23	
		相対度数	74.7%	91.1%	95.8%	
		調整済み残差	-4.4	3.7	2.0	

(注) *** ; $p < 0.001$ 、** ; $p < 0.01$ 、* ; $p < 0.05$ 、n.s. ; not significant

(2) 各クラスターの属性

前項の社会的孤立の指標に基づいて抽出された各クラスターに所属する人の属性等の特徴を明らかにするため、 χ^2 検定を行った。その結果、有意差が確認されたのは、「性別」「就業状況」である（表6）。

カテゴリー		クラスター1 (n=384)	クラスター2 (n=124)	クラスター3 (n=24)	有意差	
性別	男性	度数	218	99	18	***
		相対度数	56.8%	79.8%	75.0%	
		調整済み残差	-4.8	4.4	1.2	
	女性	度数	166	25	6	
		相対度数	43.2%	20.2%	25.0%	
		調整済み残差	4.8	-4.4	-1.2	
年齢階層	40-44歳	度数	126	36	7	n.s.
		相対度数	32.8%	29.0%	29.2%	
		調整済み残差	0.8	-0.7	-0.3	
	45-49歳	度数	128	41	8	
		相対度数	33.3%	33.1%	33.3%	
		調整済み残差	0.0	-0.1	0.0	
	50-54歳	度数	80	27	4	
		相対度数	20.8%	21.8%	16.7%	
		調整済み残差	0.0	0.3	-0.5	
	55-59歳	度数	50	20	5	
		相対度数	13.0%	16.1%	20.8%	
		調整済み残差	-1.1	0.7	1.0	
親との同居	父親あるいは 母親、もしくは 両親と同居し ている	度数	132	37	3	n.s.
		相対度数	34.4%	29.8%	12.5%	
		調整済み残差	1.6	-0.7	-2.1	
	同居してい ない	度数	252	87	21	
		相対度数	65.6%	70.2%	87.5%	
		調整済み残差	-1.6	0.7	2.1	
現在の介護経 験	している	度数	37	7	1	n.s.
		相対度数	9.6%	5.6%	4.2%	
		調整済み残差	1.6	-1.3	-0.8	
	していない	度数	347	117	23	
		相対度数	90.4%	94.4%	95.8%	
		調整済み残差	-1.6	1.3	0.8	
現在の就業状 況	仕事をし ていない	度数	46	24	12	***
		相対度数	12.0%	19.4%	50.0%	
		調整済み残差	-3.5	1.4	4.8	
	仕事をし ている	度数	338	100	12	
		相対度数	88.0%	80.6%	50.0%	
		調整済み残差	3.5	-1.4	-4.8	

(注) *** ; $p < 0.001$ 、** ; $p < 0.01$ 、* ; $p < 0.05$ 、n. s. ; not significant

まず、性別について、各クラスターにおける男性の割合をみると、「非孤立群」56.8%、「孤立予備群」79.8%、「孤立群」75.0%となっていて、「孤立予備群」や「孤立群」は、「非孤立群」に

比べて男性の比率が高い。

また、「現在の就業状況」をみると、孤立群では「仕事をしていない人」の比率が 50.0%となっており、非孤立群 12.0%、孤立予備群 19.4%と比べて極めて高い水準にある。

(3) 各クラスターにおける社会的孤立の課題

次に、社会的孤立に陥る人の課題について、各クラスター別にその傾向を確認する。先行研究からは、社会的孤立に陥る人の課題として、抑うつ傾向、貧困、健康状況の悪化などがされている⁸。そこで、上記の点に関連する調査項目について、クラスター間の関連性を確認するため、抑うつ傾向を測定する「K6合計得点」、貧困に関して「暮らし向き」と「昨年度の年収」、健康状況に関して「主観的健康状態」について、 χ^2 検定と一元配置分散分析を用いてクラスター間の比較を行った。

A. うつ・不安障害の傾向

うつ・不安障害の指標である「K6合計得点」とそのカットオフポイントである「K6合計得点が10点以上となる人の比率」をクラスター間で比較した。その結果、クラスター間の「K6合計得点」に係る平均点を比較した結果、 $p < 0.01$ の水準で統計学的な有意差が確認された。また「K6の合計得点が10点以上となる人の比率」について χ^2 検定を行った結果、 $p < 0.001$ で統計学的な有意差が確認された(表7)。

各クラスターのK6合計得点をみると、非孤立群は平均5.547点、孤立予備群は平均6.927点、孤立群は8.667点であり、「非孤立群」は「孤立予備群」「孤立群」と比較して、平均点が高かった。

また、うつ・不安障害が疑われる「K6の合計点数が10点以上の人の割合」をみると、非孤立群19.3%、孤立予備群34.7%、孤立群41.7%となっている。この指標でも「孤立群」は「非孤立群」「孤立予備群」と比較して、うつ・不安障害が疑われる人の比率が高いことが示された。

B. 経済状況

次に、社会的孤立と経済状況との関係を見るため、クラスター間で「暮らし向き」と「昨年度の年収」を比較した。 χ^2 検定ならびに一元配置分散分析の結果「暮らし向き」「昨年度の年収」ともに、 $p < 0.001$ の水準で統計的に有意であることが確認された。(表7)。

まず、クラスターの間で「現在の暮らし向き」を比べると、現在の暮らし向きが「苦しい」「やや苦しい」と回答した人の比率(合計)は、非孤立群は32.6%、孤立予備群は47.5%、孤立群は62.5%となっている。

また、クラスターごとに「昨年度の年収」を比較すると、非孤立群は平均283.1万円、孤立予備群は平均245.6万円、孤立群は平均144.7万円となっており、孤立群は非孤立群と比較して有意に年収が低かった

⁸ 例えば、斎藤(2018:30-44)では、高齢者の社会的孤立に関連している諸問題として、①ソーシャル・サポートの乏しさ、②低所得・住環境の劣悪さ、③生活満足度の低さ・孤独感・抑うつ傾向、④自殺、⑤健康寿命の喪失、⑥犯罪、があげられている。本稿では、中年未婚者を調査対象とするが、抑うつ傾向、健康、貧困といった点は、高齢者と中年未婚者にとって共通する社会的孤立の課題と考えられる。

以上のように、孤立群では、暮らし向きが「苦しい」と回答する人の比率が高く、年収も著しく低い。孤立群は貧困のリスクが、他のクラスターに比べて高いことが推察される。

(表7) 社会的孤立の課題からみた各クラスターの特徴						
カテゴリー		非孤立群 クラスター1 (n=384)	孤立予備群 クラスター2 (n=124)	孤立群 クラスター3 (n=24)	有意差	
K6合計得点	平均	5.547	6.927	8.667	**	
	標準偏差	4.826	6.061	7.534		
	範囲	0-24	0-24	0-24		
	多重比較 (Scheffe法)					
	国民生活基礎調査で、うつ・不安障害が疑われるとされる(10点以上)	度数	74	43		10
	相対度数	19.3%	34.7%	41.7%	***	
	調整済み残差	-4.0	3.2	2.1		
暮らし向き(現在)	大変ゆとりがある	度数	5	3	2	***
		相対度数	1.3%	2.4%	8.3%	
		調整済み残差	-1.6	0.5	2.4	
	ややゆとりがある	度数	42	11	1	
		相対度数	10.9%	8.9%	4.2%	
		調整済み残差	1.0	-0.5	-1.0	
	普通	度数	212	51	6	
		相対度数	55.2%	41.1%	25.0%	
		調整済み残差	3.5	-2.4	-2.6	
	やや苦しい	度数	97	36	10	
		相対度数	25.3%	29.0%	41.7%	
		調整済み残差	-1.4	0.6	1.7	
大変苦しい	度数	28	23	5		
	相対度数	7.3%	18.5%	20.8%		
	調整済み残差	-3.9	3.3	1.7		
昨年度の年収(手取り)	平均	283.141	245.589	144.708	***	
	標準偏差	215.287	201.584	134.467		
	範囲	0-2,500	0-1,300	0-400		
	多重比較 (Scheffe法)					
主観的健康	よい	度数	87	25	3	n.s.
		相対度数	22.7%	20.2%	12.5%	
		調整済み残差	0.9	-0.4	-1.1	
	まあよい	度数	89	22	3	
		相対度数	23.2%	17.7%	12.5%	
		調整済み残差	1.6	-1.1	-1.1	
	ふつう	度数	153	49	9	
		相対度数	39.8%	39.5%	37.5%	
		調整済み残差	0.1	0.0	-0.2	
	あまりよくない	度数	46	25	8	
		相対度数	12.0%	20.2%	33.3%	
		調整済み残差	-3.0	1.9	2.6	
よくない	度数	9	3	1		
	相対度数	2.3%	2.4%	4.2%		
	調整済み残差	-0.2	0.0	0.6		

(注) *** ; p < 0.001、** ; p < 0.01、* ; p < 0.05、n.s. ; not significant

C. 主観的健康

最後に、社会的孤立と主観的健康の関係を見るため、 χ^2 検定を用いてクラスター間の「主観的健康」を比較した。その結果、有意確率は $p=0.087$ となっており、クラスター間で主観的健康について、有意な差は確認されなかった(表7)。しかし、「健康状態があまりよくない／よくない」と回答した人の比率をみると、非孤立群 14.3%、孤立予備群 22.6%、孤立群 37.5%となっており、非孤立群と比較して孤立群の人は健康状態が良好ではない傾向が確認された。

5. 考察

会話頻度、受領的サポート、提供的サポート、社会参加といった孤立指標に基づいて、中年未婚者の孤立状況を類型化すると、3つのクラスターが抽出された。

各クラスターについて、社会的孤立に関する状況から整理すると、「孤立群」「孤立予備群」「非孤立群」に区分できる。中年未婚者に占める各クラスターの割合は、孤立群 4.5%、孤立予備群 23.3%、非孤立群 72.2%となっている。つまり、現在、中年未婚者で孤立している人の割合は4.5%と考えられる。

これまで孤立の分析には、類型ごとにカットオフポイントを設定することなどが行われてきた。本研究では、4つの孤立指標の関連項目を用いてカテゴリ分析を行って孤立者の比率を割り出した点の一つの特徴である。

(1) 孤立群

各クラスターの特徴をみると、「孤立群」では「ほとんど話をしない」人が9割弱を占めているなど、「非孤立群」や「孤立予備群」と比べて、他者との交流が著しく乏しい。また、受領的サポートにおいては「頼れる人がいない」と回答する人の比率が高い。さらに、提供的サポートにおいては、「家族・親族」であってもサポートを提供しないと回答する人が4割弱を占めている。また、社会参加については「参加する予定はない」と回答する人の比率が高く、社会参加の意思自体が乏しい。

次に、「孤立群」の属性をみると、男性の比率が7割以上になっている。男性の方が女性よりも孤立しやすいことは、先行研究とも一致する点である。さらに、「孤立群」では、現在就業していない人の比率が50.0%にのぼり、非孤立群の12.0%、孤立予備群の19.4%に比べて、著しく高い水準にある。通常、現役世代であれば、未婚者であっても、職場を通じた人間関係があるので、孤立しにくい。しかし、中年未婚者が無職になると、配偶者がなく、職場との人間関係をもたないので、孤立しやすいことが考えられる。社会的孤立を防止するには、中年未婚者に対する就労支援が重要だと考えられる。

なお、「年齢階層」「親との同居」「現在の介護経験」は、有意な差が確認されなかった。このうち、「親との同居」について、先行研究では、親と同居する中年未婚者の方が、単身世帯の中年未婚者と比較して受領的サポートを受けやすい点が指摘されている。今回の結果は、それとは異なるが、 $p=0.067$ であり、傾向としては、孤立群では親と同居していない中年未婚者が87.5%にのぼっており、非孤立群の65.6%、孤立予備群の70.2%よりも高い水準になっている。

社会的孤立の課題について孤立群の傾向を考察すると、孤立群は、他のクラスターに比べて、抑うつ傾向に陥りやすいことが指摘できる。特に、うつ・不安障害が疑われる10点以上の人の割

合をみると、孤立群では41.7%の人が該当しており、非孤立群の19.3%と比べると高い水準である。

また、孤立群は、経済状況が厳しいことも指摘できる。孤立群では6割を超える人が「暮らし向き」が苦しいと回答している。特に、孤立群の昨年度の年収は144.7万円であり、非孤立群の283.1万円、孤立予備群の245.6万円に比べて、著しく低い水準である。

まずは、社会的孤立に陥る中年未婚者を早期に発見して、相談支援につなげることが重要だと考えられる。その上で、支援者が、継続的に「伴走型支援⁹」を行うことや、うつ・不安障害が疑われる人には、医療機関につないでいくことなどの対応が求められる。そして、支援者との関係性を築くことができた段階で、無職の中年未婚者であれば、時間をかけながら就労支援を行っていくことも考えられる。

(2) 孤立予備群

孤立予備群の孤立状況は、概ね非孤立群と孤立群の間だと考えられる。また、孤立予備群は、現時点では孤立群に比べて孤立に陥っている状況にないが、今後、孤立する人が増えていく可能性がある。その理由としては、受領的サポートにおいて、非孤立群や孤立群に比べて、「そのことで人に頼らない」という回答する人の比率が高いことがあげられる。現時点では「そのことで人には頼らない」と考えていても、今後人に頼らざるを得ない状況になった場合に「頼れる人がいない」という状況に陥る可能性がある。また、提供的サポートをみると、孤立予備群では、「近所の人」に手助けを提供する人の比率が「孤立群」と並んで低く、社会参加への意向も低い。こうした点も踏まえると、退職後などには、地域とのつながりをもちにくい可能性がある。

孤立予備群については、現役時代から地域とつながりをもてる対策が必要であろう。一つは、仕事と生活の両立を図り、地域活動に意識的に参加することなどが考えられる。

また、孤立予備群の属性をみると、男性の比率が7割以上となり、孤立群と同様に高い。また、孤立予備群では、現在就業していない人の比率が2割程度にのぼる。孤立群よりは低いものの、「働き盛り」と言われる40代・50代では高い水準だ。無職者に対する就労支援も重要になるだろう。

(3) 非孤立群

非孤立群では、孤立予備群や孤立群に比べて、他者とのつながりをもつ人の比率が高い。

一方、社会的孤立の課題について非孤立群の状況を考察すると、非孤立群は、うつ・不安障害が疑われる10点以上の人の割合が19.3%にのぼる。これは、孤立予備群や孤立群と比較して低い水準である。しかし、厚生労働省『令和元年国民基礎調査』（詳細データ）によれば、40代・50代の調査対象者のうち、10点以上の人の割合は11.3%であった。本調査の分析対象である「中年未婚者」において、非孤立群であっても、10点以上の人が約2割と高い水準にある。そのため、「中年未婚」であること自体が、それ以外の人に比べて、うつ・不安障害の傾向が高めることが考えられる。

⁹ 奥田知志, 稲月正, 垣田裕介, 堤圭史郎 (2014) を参照。

6. 結論

本稿では、社会的孤立状況の4指標に関連した調査項目から、中年未婚者を対象にしたクラスター分析を行って、孤立の実態として、既に孤立に陥っている「孤立群」4.5%、現時点では社会的孤立に陥っていないが、今後孤立するリスクのある「孤立予備群」23.3%、孤立していない「非孤立群」72.2%であることを明らかにした。また、各クラスターの属性をみると、孤立群や孤立予備群は、非孤立群に比べて男性の比率が高いこと、孤立群は5割を無業者が占めていて、非孤立群や孤立予備群と比べて、高い水準にあることを指摘した。さらに、社会的孤立に陥る人の課題についてみると、孤立群は、うつ・不安障害が疑われる人の比率が4割強になっていることや、低所得者の比率が高いことを示した。

今後、社会的孤立に陥る中年未婚者を早期に発見して相談支援につなげることや、現役時代から地域との関係性を築いていくことが重要だと考えられる。その上で、支援者が継続的に「伴走型支援¹⁰」を行うことや、うつ・不安障害が疑われる人には、医療機関につないでいくことなどの対応が求められる。そして、支援者との関係性を築くことができた段階で、無職の中年未婚者であれば、時間をかけながら就労支援を行っていくことも考えられる。

最後に、本分析の限界と今後の課題を指摘したい。第一に、孤立群はなぜ孤立しているのかといった因果関係までは分析できていない。孤立の要因が40代・50代に至るまでのライフコースにおいて、どのような出来事があったかなどの分析を深める必要がある。

第二に、孤立群のサンプル数に限界があり、属性や課題について、孤立群の分析が十分できていない点である。例えば、孤立群は、無職者の比率が5割を占めており、職場との人間関係をもたないことが考察されるが、残りの5割は有職である。有職であっても孤立する中年未婚者の分析を行うには、サンプル数を増やすなどして分析することが必要と考えられる。

第三に、今後の孤立予備群の動向についての分析である。孤立予備群は、今後、孤立群に向かうのか、あるいは、非孤立群に向かうのか。また、孤立予備群が、孤立群に向かわないようにするには、どのような対策が必要なのか。今後の課題としたい。

<参考文献>

- 阿部彩(2014a)「生活保護・貧困研究の50年：『季刊社会保障研究』掲載論文を中心に」(『季刊・社会保障研究』Vol.50 No.1・2, 2014年9月)
- 阿部彩(2014b)「包摂社会の中の社会的孤立—他県からの移住者に注目して—」(『社会科学研究』第65巻第1号, 2014年5月)
- 阿部彩(2014c)「日本における剥奪指標の構築に向けて：相対的貧困率を保管する指標の検討」(『季刊・社会保障研究』第49巻第4号, 2014年3月)
- 阿部彩(2010)「低所得世帯と被保護世帯の生活実態—消費パターンとウェル・ビーイング—」(『季刊・社会保障研究』第46巻第2号, 2010年9月)
- 阿部彩(2007)「日本における社会的排除の実態とその要因」(『季刊・社会保障研究』第43巻第1号,

¹⁰ 奥田知志, 稲月正, 垣田裕介, 堤圭史郎 (2014) を参照。

2007年6月)

- 石田光規(2011)『孤立の社会学: 無縁社会の処方箋』勁草書房
- 稲垣誠一(2013)「高齢者の同居家族の変容と貧困率の将来見通し—結婚・離婚行動変化の影響評価—」
(『季刊・社会保障研究』第48巻 第4号, 2013年3月)
- 奥田知志, 稲月正, 垣田裕介, 堤圭史郎(2014)『生活困窮者への伴走型支援』明石書店
- 河合克義, 菅野道生, 板倉香子(2013)『社会的孤立問題への挑戦—分析の視座と福祉実践』法律文化社
- 玄田有史(2013)『孤立無業 (SNEP)』日本経済新聞出版社
- 小辻寿規(2011)「高齢者社会的孤立問題の分岐視座」『コア・エシックス』第7巻, 2011年3月
- 国立社会保障・人口問題研究所(2014)「2012年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査報告書」(『調査研究報告資料第32号』、2014年3月)
- 斎藤雅茂 (2018)『高齢者の社会的孤立と地域福祉』明石書店
- 斎藤雅茂 (2012)「高齢者の社会的孤立に関する主要な知見と今後の課題」(『季刊家計経済研究』春号、94号)
- 斎藤雅茂, 冷水豊, 武居幸子, 山口麻衣(2010)「大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連」(『老年社会科学』第31巻 第4号, 2010年1月)
- 内閣府(2014)『「絆」と社会サービスに関する調査 結果の概要』
- 長野誠治 (2016)「第4回 独身者(40~50代)の老後生活設計ニーズに関する調査: 調査の目的と方法」(『年金研究』公益財団法人年金シニアプラン総合研究機構, 3: 189-209)
- 藤森克彦 (2017)『単身急増社会の希望』日本経済新聞出版社.
- 藤森克彦 (2016a)「社会的孤立4類型からみた単身世帯における孤立の実態分析」(国立社会保障・人口問題研究所『生活と支え合いに関する調査(2012年)二次利用分析報告書(平成27年度)』所内研究報告, 66)
- 藤森克彦 (2016b)「中年未婚者の生活実態と老後リスクについて—『親など同居する2人以上世帯』と『単身世帯』からの分析」(『年金研究』公益財団法人年金シニアプラン総合研究機構, 3: 78-111)
- 藤森克彦(2015)「子どもの有無別・所得階層別にみた一人暮らし高齢者の貧困・要介護・孤立への不安感—内閣府『平成26年度一人暮らし高齢者に意識調査』の分析」(『新情報』103号、2015年)
- 藤森克彦 (2010)『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版社
- Townsend, P. (1963). *The Family Life of Old People: An Inquiry in East London*, Routledge & Kegan Paul.
(服部広子・一番ヶ瀬康子訳 (1974): 老人の家族生活—社会問題として. 家政教育社)